悲惨な戦争体験・・・疎開

札幌市医師会
新札幌パウロ病院
高階（たかしな）　俊光（としみつ）

小生も後期高齢者の仲間入りの年齢になってしまい、人生を振り返って高校卒業以来、50年以上付けている日記を読み返していたら、疎開の話が出てきました。

1945年（昭和20年）終戦の３か月前、長女のお袋17歳（昭和３年生まれ）、次女の叔母８歳（昭和12年生まれ）と三女の叔母５歳（昭和15年生まれ）の３人が母親の実家の青森県五所川原市に疎開した記述がありました。

終戦近くになってお袋の実家の室蘭市の輪西町にも艦砲射撃があり、山の麓の防空壕に２回逃げ入った。お袋の母親はこれからも続く艦砲射撃に５人の子供を連れて逃げるのは大変だからと、青森の農家の実家に娘３人の面倒を見てくれと手紙を書いて３人を疎開させたのである。青森の実家では母親の両親は健在であったが、母親の兄が実権を握っていた。お袋は農家を手伝っていたが、その兄から歓迎されなかった。次女は学校に入っていた。

両親は兄である長男を跡取り息子と猫可愛がりして育て、息子もその気になって自分ほど偉いものはいないと横柄に育って、天下を取ったような振る舞いで妹の母親にも暴力（今でいうDV）などで心身とも辛く当たっていた。これは母親が離れて室蘭に来た大きな原因の一つでもあった。両親も腫れものに触るような扱いで遠慮していた。

両親はとてもいい人で、お袋ら３人は孫だからとても優しく可愛がってくれたが、兄はお袋たち３人を毛嫌いしているのを17歳のお袋は感じ取っていた。両親は兄に隠して味噌をつけたおにぎりをそっとくれて、納屋に隠れて本当に美味しくておいしくて食べたこともあった。

母親もお金に困っていて、兄への送金も滞っていた。それで三女はまだ小さいし、汽車賃もかかるので、三女を置いてお金を少しでも工面してもらうために室蘭の輪西に行こうと、お袋は次女を連れて２人で朝早く五所川原から汽車に乗って青森駅に向かった。その途中、艦砲射撃が２回あり、汽車が止まって草むらに逃げ隠れた。運よく汽車は無傷で済んだ。やっとの思いで青森の連絡船乗り場に着いたと思ったら、艦砲射撃で火の手があちこちで上り燃えていた。もちろん連絡船は出航できず、仕方なく待合室で過ごそうとしたら、さらに艦砲射撃は激しく青森駅を標的にして攻撃してきた。皆逃げてくれ・・・とアナウンスがあり、駅の近くに５人くらいしか入れない小さな防空壕が10個ばかりあり、そこに逃げ込んだ。その防空壕も攻撃の対象になり、隣の防空壕をはじめ、幾つも燃えていた。しっかりと閉まらない入口のドアの隙間から、何機もの爆撃機が次から次と低空飛行でやってくるのが見え、ババーンと機銃掃射である。耳が破裂するくらいの爆音で、みんな耳を抑えていた。地震のように激しく揺れて、もう駄目だと思って頭を抱えていた。運よくお袋たちの所には当たらなかった。隣の防空壕をはじめ、さらに多くの防空壕が燃えていたが、お袋たちはそれどころではなく、ここから一刻も早く逃げ出すことしか頭になかった。もう命はないと思った。

やがて戦闘機が去って一瞬静けさが戻り警報解除になったが、またいつ攻撃が来るかもしれないからとにかく一刻も早く離れて逃げてくれと駅員のマイクが叫んでいた。お袋たちはとにかく五所川原に戻ろうとしたが、道は分からず仕方なく線路伝いに歩いたのである。夜になり、お腹が空いて２人は農家の所に行って、水を飲ましてくださいとお願いしたところ、おにぎりとキュウリ２本をいただいた。何とかお腹を満たして再び歩いて途中の駅で五所川原へ向かう汽車が出発すると知り、線路から汽車に乗ってようやっと五所川原駅に着いた。夜中だったけど８月だから寒くはなく、そこで一晩過ごした。夜が明けてうわさを聞いたいとこが馬車で迎えに来てくれ、それに乗って実家に向かった。戦闘機は五所川原にもやって来て、その度に防空壕に逃げた。青森で隣などの防空壕があれだけ燃えていてよく生きられたと思う、と後で次女は述懐している。

そのころ室蘭にも死者約400人が出たイタンキ浜からの艦砲射撃があった。山の麓に作られた防空壕に避難する際に、皆がどうぞどうぞと言って議員さん、名士の人や金持ちの人たちを安全と思われた奥の方に導き入れた。私の祖父母家族の４人を含む貧乏の人たちは、危険な入口の隙間だらけのドアのそばにしか居場所がなかった。隙間から何機もの空爆している戦闘機が見えていた。本格的な艦砲射撃が始まると、地震のようなもの凄い地響きが続いて、山は激しく揺れて奥の方から大きく崩れ、奥にいたお偉方さんや金持ちの人たちがのみ込まれて多くの死傷者が出た。真っ暗な中でも轟音と人のざわめきで何が起こったかすぐにわかり、入口にいた祖父母らは戸を開けて逃げることができた。貧乏人が故に命だけは助かったのである。人生、命までも何が幸いするかわからない。私の祖母はこの話を何度もして聞かせてくれた。

この室蘭の艦砲射撃で多くの死者が出た。輪西の実家の斜め向かいに、私も小さい時に祖母に手を引かれてよく見に行ったことのある映画館『大黒座』は大きな建物だからと、沢山の死体が運び込まれて安置されていたと後になって聞いた。

防空壕といえば、子どもの頃富士製鉄（今の日本製鉄）の社宅街の中にも、細長いウナギの寝床のような奥まった防空壕があった。２度入ったことがあるが、当然中は真っ暗で当時じっと身を潜めて寄り合っていたことが容易に想像できた。

もう80年、半世紀以上前の話です。日本人の平均寿命が50歳を超えたのは昭和22年（1947年）です。小生は昭和25年（1950年）生まれで、小生にしたらちょっと前の話ですが、今の若者にとっては歴史です。

時の流れは早いですが、こういう時代もあったと今の人たちの頭の片隅にでも刻んでいただければ、こんな嬉しく幸いなことはありません。